様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０３７５

研究課題名（和文）エリアス・カネッティ――作品と思想の変遷

研究課題名（英文）Thoughts and Works of Elias Canetti

研究代表者
須藤　温子（香田温子）（Suto, Haruko）

日本大学・芸術学部・准教授

研究者番号：７０５３１８８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ノーベル文学賞受賞作家エリアス・カネッティの文学作品と思想を文学形式、権力論、人物描写の変遷からとらえなおし、これらの変遷と作家本人のユダヤ人としてのアイデンティティの関係を明らかにした。チューリヒ中央図書館にて遺稿・蔵書調査、娘のヨハンナ・カネッティとのインタビューを行い、①カネッティが伝統的な文学ジャンル「キャラクター」を念頭に膨大な人物描写を残した作家であったこと②亡命を余儀なくされたにもかかわらず、オーストリアの戦後の文化政策ではオーストリア作家として高い評価を受けたこと③コスモポリタンを自認し、ナショナリズムに否定的な態度が作品・思想全体に反映されていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This paper reconsiders the thoughts and works of Elias Canetti (1904-1995), the Nobel laureate author (1981), including changes in his literary style, thoughts about power, and descriptions of fictional and real characters. The aim of this paper is to make clear the close connection between his changing style—especially after the WWII—and his identity as Jewish. I made use of Canetti's books and posthumous works at the Zurich central library and also interviewed Johanna Canetti, Canetti's only daughter. As a result of my work, it became clear that Canetti is first an author who leaves an enormous amount of personal description based on his characters; second, Canetti is regarded as an Austrian writer by the Austrian government's cultural and foreign policy after the 1960's, although he was forced to go into exile from Vienna in 1938. And third, Canetti identified as a cosmopolitan and reflected this throughout in his works and thoughts.

研究分野：ドイツ語圏文学・文化

キーワード：エリアス・カネッティ　ヴェーザ・カネッティ　亡命　遺稿　ユダヤ人　思想　ドイツ語　表象

１．研究開始当初の背景

（１ 国内における背景）2008 年に本邦初のカネッティ・シンポジウムが行われ、2009 年に研究叢書『≪群衆と権力≫の射程　エリアス・カネッティ再読』が出版された。その後、2013 年に訳書『伝記　エリアス・カネッティ』（スヴェン・ハヌシェク）が出版された。研究代表者は両プロジェクトに携わりカネッティ研究を進めてきた。しかし、国内では作家カネッティ、作品、思想を多角的かつ総合的に扱った研究成果が出ていなかった。そこで本研究では、研究代表者のこれまでの研究の蓄積をもとに、包括的な研究の成果を提示することとした。

（２ 国外における背景）カネッティの死から八年後と十年後の 2002 年と 2004 年は、カネッティ研究にとって一大転機であった。チューリヒ中央図書館（スイス）に保管されている遺稿が、一部を除き公開されたためである。また 2005 年は生誕百周年にあたり、ハンザー社からは全集の第十巻（最終巻）が刊行され、これまで散在していた対話、講演、小論などの一次文献がまとめられ、カネッティを特集した学術誌『テクストと批評』では、一次・二次文献目録が整理された。遺言で死後十年間は伝記の出版が禁止されていたが、同年の 2005 年には『伝記』（ハヌシェク）が発表され、遺稿公開後の第一級の研究書として遺稿研究を飛躍的に前進させた。これによって、謎に包まれたカネッティの生涯、特に 1938 年のウィーンからの亡命後の様子が明らかになりつつある。本研究においても、遺稿調査のほか近年刊行された往復書簡の考察と分析を行い、カネッティ自身や作品および思想にかんする定説の再検証を行った。

（３ 研究代表者の研究の蓄積）

カネッティの作品に特徴的な三つの変遷にしたがい、以下に研究代表者のこれまでの研究の蓄積をあげ、本研究で包括的なカネッティ研究の成果をまとめる条件が整っていることを示す。

①文学形式の変遷

第二次世界大戦勃発を機に、カネッティが小説すなわち虚構の創作を放棄し、文学の可能性を断想形式がもつ「明晰さ」に見いだしたことで、断想（Aufzeichnung）が彼の特徴的で代表的な表現形式となったことを明らかにしてきた。また、その形式移行の決定的要因が、第二次世界大戦におけるホロコーストではなく広島への原爆投下であったことも論証した。そして、カネッティが断想と並行して取り組んだのが自伝の執筆である。本研究では、以上の成果をふまえて自伝に着目した。

②権力論の変遷

『群衆と権力』では、権力論の焦点は群衆そのものの解明と権力批判にあったが、『群衆と権力』以降は問題として死が前景化し、主に断想集で「死に対する抵抗」という独自の死生学が展開されていることを明らかにした。本研究では、カネッティの死生学がどのような変化をとげたのかを明らかにした。

③人物描写の変遷

カネッティ作品の特徴の一つに、パロディ、風刺、戯画化がある。これまでの研究では『眩暈』（1935）をオットー・ヴァイニンガーの『性と性格』（1905）の、さらには 19 世紀末以降一般に流布していた反ユダヤ主義的ユダヤ人表象のパロディとして捉え、その有効性を論じてきた。カネッティはこうした戯画的な人物描写を『耳証人　50 のキャラクター』（1974）や他の作品で展開している可能性があった。本研究ではこの可能性を追及した。

## ２．研究の目的

本研究は、ドイツ語圏作家エリアス・カネッティ（1905-1994）の文学作品と思想の変遷を辿りつつ、本邦で初めてカネッティ研究の総論にとりくむことを目的とした。カネッティはセファルディ系のユダヤ人で、1938 年にウィーンから亡命、1981 年にノーベル文学賞を受賞する。その作品は、ウィーン初期モデルネの小説『眩暈』（1935）、戯曲、異色の文化人類学的研究書『群衆と権力』（1960）、自伝、膨大な断想集と多岐にわたる。本研究では、研究代表者のこれまでのカネッティ研究の成果を基盤に、カネッティの作品と思想を三つの変遷、つまり（１）文学形式の変遷、（２）権力論の変遷、（３）人物描写の変遷からとらえなおした。そして、これらの変遷とカネッティのユダヤ人としてのアイデンティティとのかかわりを、遺稿や往復書簡の考察をふまえて明らかにした。

## ３．研究の方法

（１）文学形式の変遷、（２）権力論の変遷、（３）人物描写の変遷については、チューリヒ中央図書館（スイス）に赴き、カネッティの遺稿と蔵書の調査・分析を行ったほか、現地でカネッティの一人娘のヨハンナ・カネッティにインタビューを行い、研究に反映した。とくに第二次世界大戦中の断想および遺稿、広島原爆関連資料、17 世紀の「キャラクター」関連書籍を中心に調査した。また、所属研究機関の日本大学芸術学部図書館を利用し、イギリス亡命後のカネッティ夫妻とその交友関係に関連する文献資料を国内外より入手、分析した。国内のカネッティ研究者とは定期的に意見交換を行った。特に北島玲子氏（上智大学）主催のカネッティ研究会に参加して研究成果を発表し、オーストリア文学やユダヤ文化とカネッティの関係について専門的な見解を知ることができた。国外では遺稿に詳しいスヴェン・ハヌシェク氏や一人娘ヨハンナ・カネッティ氏と交流し、貴重な証言や知見を得た。

## ４．研究成果

### （１）文学形式の変遷

カネッティの自伝にかんする戦後のオーストリア文学界や文化政策における評価について、以下のことが明らかになった。ドイツ語圏で 1960 年代以降、特にオーストリアでは「古き佳きウィーン時代」を描いたとして、彼の自伝は高い評価を受けた。これにより、オーストリアの文化政策の一環である過去の取り組みにおいて、カネッティは 1938 年のオーストリア併合によって亡命を余儀なくされたにもかかわらず、「オーストリア作家」として迎えられ、不動の地位を与えられたと言える。

### （２）権力論の変遷

第二次世界大戦中の 1940 年代から晩年に至るカネッティ独自の死生観について再検討し、死に抗する態度の変化を明らかにした。カネッティを死への抵抗に突き動かしたのは、生き残る者の抱く罪悪感であり、彼にとって書くことは死者を回想し、生き残った罪を克服することであった。しかし、晩年になると、娘の誕生を機に罪悪感は消える。カネッティにとって書くことが、生き残る者を自分以外の誰かとして想定し、死にゆく自身の生を彼らに託す、肯定的な実践となったからである。

### （３）人物描写の変遷

カネッティが古代ギリシャに始まり 17 世紀イギリスで開花した文学ジャンルである「キャラクター」に造詣が深いことが、蔵書・遺稿調査で確認できた。そして、カネッティが文学ジャンル「キャラクター」を意識して作品『マラケシュの声』『耳証人』『断想』『雷光のなかのパーティ』のみならず、遺稿にお

いても膨大な人物描写を残したことを明らかにした。

これまでの研究代表者のカネッティ研究の蓄積、遺稿と蔵書調査、往復書簡の分析、ヨハンナ・カネッティへのインタビューをもとにした（1）～（3）の研究成果から、以下を結論とした。カネッティはコスモポリタンであることを自認し、ナショナリズムに否定的であった。彼は、遍歴と祖国喪失によってユダヤ人としての自己を規定し、その態度は作品全体に反映されていると言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5 件）
① 須藤　温子 エリアス・カネッティは何語で泣いたか―母語にして迫害の言語とユダヤ性、日本大学芸術学部紀要、査読有、第 66 号、2017 年、掲載確定

② 須藤　温子「わたしはいかなる死も認めない」―エリアス・カネッティの死生学、日本大学芸術学部紀要、査読有、第 64 号、2016 年、pp. 75-86

③ 須藤　温子 戦後オーストリアによる忘却と称賛―亡命作家ローベルト・ノイマン、ヴェーザ・カネッティ、エリアス・カネッティを例に、日本独文学会研究叢書『ウィーン 1945-1966―オーストリア文学の「悪霊」たち』、査読無、第 114 巻、2016 年、pp. 53-71

④ 須藤　温子 エリアス・カネッティの『耳証人』とキャラクターの系譜学、ASPEKT 別巻１　高橋輝暁先生定年退職記念文集１、日独文化論考（別巻 1 号）、査読無、pp. 269-289

⑤ SUTO, Haruko Verzicht auf den Gesellschaftsroman? Elias Canettis Roman Die Blendung (1935) und der 2. Weltkrieg. Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit. PETER LANG（7 巻）、査読無、pp. 335-339

〔学会発表〕（計　5 件）
① 須藤　温子 楽園からの追放―ヴェーザ・カネッティの小説『亀』とオーストリア併合、口頭発表、カネッティ研究会、上智大学（東京都、千代田区）、2016 年 9 月 15 日

② 須藤　温子 ヴェーザ・カネッティの亡命小説『亀』について―迫害されたユダヤ人の視点から、口頭発表、カネッティ研究会、上智大学（東京都、千代田区）、2015 年 9 月 26 日

③ 須藤　温子 ウィーン 1945-1966 ―オーストリア文学の「悪霊」たち、戦後オーストリアによる忘却と称賛―亡命作家ローベルト・ノイマン、ヴェーザ・カネッティ、エリアス・カネッティを例に、シンポジウム、日本独文学会春季研究発表会、武蔵大学（東京都、練馬区）、2015 年 5 月 30 日

④ SUTO, Haruko Hypokrisie als Charakter. Eine genealogische Überlegung. Humboldt-Kolleg Kyoto 2014. Wie gleich ist, was man ver-gleich-t? Ein interdisziplinäres Symposium zu Humanwissenschaften Ost und West. 口頭発表、フンボルト・コレーク、コープイン・京都（京都府、京都市）、2014 年 3 月 2 日

⑤ 須藤　温子 人間蒐集家の系譜―テオプラストスとエリアス・カネッティの『カラクテーレ』について、口頭発表、日本独文学会秋季研究発表会、北海道大学（北海道、札幌市）、2013 年 9 月 28 日

〔図書〕（計　1 件）

① 須藤　温子 他（共訳）、SUP 上智大学出版、エリアス・カネッティ　伝記　上巻・下巻、2013 年、上巻 468、下巻 494

〔その他〕

ホームページ等

日本大学教職員情報検索　芸術学部芸術教養課程准教授　須藤温子

http://kenkyu-web.cin.nihon-u.ac.jp/Profiles/91/0009081/profile.html

## ６．研究組織

(1)研究代表者

須藤　温子（SUTO, Haruko）

日本大学・芸術学部・准教授

研究者番号：70531888